

主 題：完成した救い

聖書箇所：ヨハネの福音書19章17-30節

きょう私たちは主イエス・キリストの降誕を記念した礼拝を主に捧げています。2000年たって今も世界じゅうでこの主イエス・キリストのご降誕を人々が祝っている。しかしながらイエス・キリストの最期は十字架に架かって死なれるというものでした。一体どうして主イエスは十字架に架かって死なれたのかです。イエス様が一体何をしたと言うのか——。イエス様がこの地上に来られた時、苦しんでいた病人たちを癒されました。死人をその死者の中からよみがえらせた。必要な時に食べ物を与えられた。人々を励まし、人々を助け、人々のために確かに生きて来られた。一体彼が十字架にふさわしいどんな罪を犯したと言えるのでしょうか。私たちがこのみことばからはっきりと教えられていることは、主は十字架に架からなければならぬような罪を犯してはいないということです。正確に言えば罪は一つも犯しておられない。彼はすべてにおいてきよく正しいお方でした。

### ★ イエス様がこの世にお生まれになった本当の意味

ではどうしてそのきよい正しい方が十字架に架けられたのか——。それは、それこそがイエス・キリストがこの世にお見えになった目的だったからです。イエス・キリストは死ぬためにこの世にお見えになったのです。きょう私たちは主イエス・キリストがこの世にお見えになったその目的をご一緒に学んでまいります。この地上における特に最後の出来事から、そのことを学んでいきます。二つの相反する行為からそのことを学んでいきたいと思えます。どういう行為かと言うと、救い主に対する人間の行為です。また人に対する救い主の行為です。人間はこの救い主をどのような態度で迎えたのか、また人に対して主はどのように応じてくださったのかです。

なぜ私たちがこんなことをこの日に学ぶのかというと、主が来てくださったことの真の意義を知るためです。なぜイエス様が来てくださったのか、その本当の意味を知るためにです。また同時に主がこの世に来てくださったことを心から喜ぶ者となるためにです。

### A. 救い主に対する人間の行為 17-24節

#### 1. 晒し者にする 17節

きょうのテキストはヨハネ19：17からです。イエス・キリストの最期がここに記されています。17節「彼らはイエスを受け取った。」とあります。なぜこんなことが記されているかということ、ピラトによってイエスを十字架に処するという刑が決まった時に、ピラトは彼を百人隊長に預け、そして百人隊長は刑を執行するために兵士たちに託すのです。ですから、イエスの十字架を実際に執行するために兵士たちがイエスを受け取った様子が17節の初めに出てきます。その後、「そして、イエスご自分で十字架を負って『どくろの地』という場所（ヘブル語でゴルゴタと言われる）に出て行かれた。」ということがまず最初に記されています。

当時、十字架刑に決まった罪人は町の中を自分の十字架を負って、一般的には非常に長めに歩かされたと言われていました。というのはこれは群衆の注意を引くためであり、またその罪人を蔑み、嘲笑するための見世物だったのです。ですからできるだけ長く晒し者にしたのです。イエス・キリストも同じように扱われました。救い主が来てくださったのに、その救い主に人間が何をしたかということ、彼を蔑み、彼を嘲り、彼を嘲笑したのです。私たちが救うために来てくださったお方に対して人間はこのような扱いをしたのです。

#### 2. 最も大きな罪を犯した者として処刑した 18節

続けて18節に「彼らはそこでイエスを十字架につけた。イエスといっしょに、ほかのふたりの者をそれぞれ両側に、イエスを真中にしてであった。」、3本の十字架が立っていたことがここに記されています。十字架に架けられるというのは、のろわれた者であるとみことばが教えています。ガラテヤ3：13です。実はこの十字架刑は実際にはマケドニアやペルシャ、シリア、エジプト、そしてローマ帝国において実施されていた処刑の方法です。ユダヤ人たちは十字架よりも石打ちの刑を用いたようです。ローマ帝国において実際例外も存在していますが、この十字架という処刑法は奴隷に適應され、その中でも最も大きな罪を犯した者がその対象となったのです。彼らは救い主なるイエス・キリストを犯罪人の一人として十字架で殺すことを願いました。ということは、私たちが救うためにこの世に来てくださったお方を犯罪人の一人として、しかもその中でも最も罪の重い、最も汚れた存在としてイエスを十字架にはりつけにしたのです。

#### 3. 罪状は「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」 19節

それだけではなかったのです。19節に「ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには『ユ

ダヤ人の王ナザレ人イエス。』と書いてあった。それで、大ぜいのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったからである。またそれはヘブル語、ラテン語、ギリシヤ語で書いてあった。そこで、ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、『ユダヤ人の王、と書かないで、彼はユダヤ人の王と自称した、と書いてください。』と言った。ピラトは答えた。『私の書いたことは私が書いたのです。』とあります。十字架の上に掲げられていた罪状書きには「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」と書かれていた。非常に興味深いことは、罪状書きですから、本来ならそこにこの人物はこれこれのことをしたから十字架に値するのだと書きます。でも、聖書が明確に私たちに教えてくれていることは、裁判官はこれしか書けなかった。調べても調べてもイエスのうちに十字架に値する罪がなかったことをこれは明らかにしています。一つの罪も記すことができない。ただ書けたことは「ユダヤ人の王ナザレ人イエス」でした。どうしてこれが十字架に値します？つまりピラトは彼が宣言したように、この罪状書きでもこの人のうちには罪がないことを明らかにするのです。

さてこの罪状書きはヘブル語、ラテン語、ギリシヤ語の3カ国語で書かれていました。ヘブル語というのは当時パレスチナのユダヤ人たち、もちろんユダヤ人以外もそうですが、彼らが話していたことば、アラム語です。ラテン語は政治や行政において使われていたことばです。ギリシヤ語というのは商業や文化の世界で使われたことばです。なぜこんなふうにかかれたかという、彼らは本当はアラム語を話すはずですが、パレスチナから遠く離れて住んでいる者たちはアラム語を忘れていた可能性があったのです。そこであらゆる人がこの罪状書きを読めるように、少なくとも彼らが理解できることば、ギリシヤ語でもこのメッセージが記されました。まさにこれを見ると、ピラトもそうだし、それを見た人々も明らかにこれらを通して人々はこれがユダヤ人の王なのかと、イエスを蔑視したのです。多くの人々が都から出てその光景を見たでしょう。その罪状書きを見た時に彼らはその十字架にはりつけにされているイエスを見て、お前がユダヤ人の王ならばなぜそこから降りて来ないのか？ありとあらゆることを思って彼を蔑み、侮ったはずです。ピラトにもその意図を見て取ることができます。ユダヤ人たちに対して、全く無力で何もすることができない、ただこうして十字架にはりつけにされ、血を流し、今まさに死のうとして、これがお前たちの王なのだ。ですからユダヤ人たちは罪状書きを変えてくれと言います。「ユダヤ人の王、と書かないで、彼はユダヤ人の王と自称した、と書いてください。」と。それに対してピラトは「私の書いたことは私が書いたのです。」と答えています。ピラトが言いたいことは、もうおまえたちの好き勝手にはさせない。おまえたちは勝手にイエスを殺すように訴えてきて、あなたたちの要求を聞いて来た。しかし、「私の書いたことは私が書いた」、私はこれを変えることをしないと。そしてこのユダヤ人たちとピラトとのいろいろなやり取りを想像することができます。こうして人々は徹底してこの救い主を蔑視し続けるのです。

#### 4. イエスの着物を分け合った 23-24節

四つ目23-24節にイエスの着物を分けた様子が記されています。「さて、兵士たちは、イエスを十字架につけると、イエスの着物を取り、ひとりの兵士に一つずつあたるよう四分した。また下着をも取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった。そこで彼らは互いに言った。『それは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。』それは、『彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた。』という聖書が成就するためであった。」と記されています。兵士ひとりひとりにイエスが身に着けていたものが「一つずつあたるよう四分した」とあります。実は普通罪人が身に着けていたものは処刑を執行した兵士たちのものになりました。ここでも4人の兵士たちがイエスが身に着けておられたものを分けています。まず上着、履いておられたサンダル、頭につけていた被り物、そして帯の四つのもを四分するのですが、もう一つ五番目に縫い目のない一枚織りの下着であったと書かれています。本来ならばこれを四つに切ってそれぞれに分け与えるのですが、それをしなかったのは、これがイエス様が持っておられたものの中で一番高価だったからです。そこで彼らはこれを破ってしまったら、価値が下がるからそのままの状態にして、くじ引きをして当たった者がこれを自分のものにしよう決めてくじを引いたことがここに記されていました。兵士たちはイエス・キリストがまさに十字架に架かっておられるのに、ほかの犯罪人と同じようにしか見ていません。彼らの関心はイエス・キリストのことではなくて、自分たちが何を取るかによってどう自分の私腹を肥やすか、そのことしか考えていなかった。救い主が十字架に架かってくださっているにもかかわらず、そこにいた兵士たちの関心はイエスではなくて物であり、そしてそれをもって得ることのできる金でしかなかった。

今私たちが見て来たのは、人間が救い主に対して行った行為でした。彼らはこういうふうに関心を持って救い主を迎えたのです。救い主に対してこんな扱いをしたのです。無実の人に対して、イエスを不当にさばき、十字架につけました。ここには人間たちが救い主をどのように扱ったのかということが記されていました。しかし、それではこの救い主がこの人々にどのように応じられたのか、彼らがイエスを罵った時にイエスは罵り返したのか、そんなことは一切記されていません。救い主を嘲る者たちを呪ったというよ

うなことも記されていません。イエス・キリストは無言で十字架に架かっていかれた。私たちが思うのはなぜご自分の無罪を主張されなかったのか、それをするのができたらひょっとしたら十字架に架かることなく、そこから自由にされた。しかしイエス・キリストはご自分から進んで十字架に架かって行かれた。それは最初に見たように、死ぬことが主イエス・キリストがこの世にお見えになった目的だったからです。このようにイエス様は言われています。「人の子が来たのも、……多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」、マルコ 10 : 45 です。また「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。……わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」とヨハネ 10 : 18 にあります。こうして死ぬためにこの世に来てくださった救い主イエス・キリストは、ご自分からそのいのちをあゝ十字架の上で捨ててくださった。

今私たちはこの救い主に対して人々がどのように扱ったのかを見てきました。人々は十字架にイエスをつけました。でもそれはイエス・キリストが実際に十字架に架かる約 700 年前の預言者によって預言されていたことでした。イザヤ 53 : 12 に「わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。」とあります。まさに私たちが今見て来たように、その罪人のひとりとしてイエス・キリストが数えられたという話です。彼は両側に二人の犯罪人を置いた状態で、真ん中の十字架にかけられたと。また着物を分けることも我々は見えてきました。ダビデがそのことを詩篇 22 : 18 の中で預言していました。「彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。」とこんなに明確に、今私たちが読んだこのありさまを神はダビデを通して預言しておられた。イエス様は 28 節、十字架の上で「わたしは渇く」と言われた。実はこれも詩篇 69 : 21 で「私が渇いたときには酢を飲ませました。」と記されています。確かに我々はイエス様の最期に何が起こったのかを見てきました。でも我々がまず気づかなければいけないのは、同時にそれは偶然の成り行きでそうなったのではない、それはすべて神が預言されていたとおりだったということです。神の預言どおりにイエス・キリストは十字架に架かり、人々はイエスの着物を分け合い、そして彼が渇いた時に酢を飲ませた。これは何を意味しているのかというと、このイエス・キリストこそが確かに間違いなく神が約束されていた救世主だということです。そしてその方を人間はこのように扱った。

今の私たちがこうしてこの光景を見ると、彼らが大変恐ろしい罪を行なったと思います。神である方にこんな扱いをしてきたのです。神である方をこのように嘲り、蔑み、そして十字架につけたと。このような大変大きな罪を主に対して犯した人たち。残念ながら私たちはだれひとりとして彼らを責めることができない。なぜなら私たちも同じことをしたからです。救い主が生まれてくださったのに私たちはその方に全く感謝もしなかった。その方が十字架で死んでくださったことを聞いても我々は悔い改めてこの方を信じようとはしなかった。救い主なる方に対する私たちの扱いというのは彼らと同じでした。

## B. 人に対する救い主の行為 25-30 節

しかし、そんな罪深い我々人間に対してイエスがどのようなことを成してくださったのか、今度は人に対する救い主の行為を見てください。そこには憐れみがあふれています。

### 1. 母マリヤに対する憐れみ 25-27 節

25 節のところに、「兵士たちはこのようなことをしたが、イエスの十字架のそばには、イエスの母と母の姉妹と、クロパの妻のマリヤとマグダラのマリヤが立っていた。」と書かれています。ヨハネは、イエス様の十字架のところに 4 人の女性たちがいたと言っています。イエス・キリストの母とその姉妹、これはヨハネとヤコブの母のことです。そしてクロパの妻のマリヤとマグダラのマリヤ、この 4 人の姉妹たちが自分たちの身を案じることなくイエス様のもとにいたのです。自分たちの身に何が起こるか、そんなことを考えずに彼らはイエス・キリストに付き従っていた。そこでイエス様をご自分を産んでくれたマリヤに対してこんなことを言っています。26 節「イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に『女の方。そこに、あなたの息子がいます。』と言われた。それからその弟子に『そこに、あなたの母がいます。』と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。」と。自分の母親に対して「お母さん」と言わず「女の方」と言った。実はイエス様がマリヤのことをこのように呼ばれたのは、ここが初めてではありません。あのカナの婚礼の時、イエス様が水をワインに変えられた時に同じようにマリヤをこのように呼んでおられます。恐らくこのことばを聞いた時に、マリヤはこのイエスは確かに自分がお腹を痛めて産んだ子だ、そこには間違いはないのですが、それ以上の存在であるということを改めて思ったでしょう。マリヤはずっと生まれて来たこの幼子、イエスがどのような存在なのか、さまざまなケースでそのことを知らされてきました。ここで主イエス・キリストが自分を生んだ母親に対して憐れみを示していることを実際に見るのです。イエス様はほかの女性たちには何も言われていない。自分の母親に対してだけです。「そこに、あなたの息子がいます」と。そしてこの「息子」と言われた人物はこのヨハネの福音書を書いたヨハネです。その時からヨハネはマリヤを「自分の家に引き取った」と。マリヤとヨセ

フの間にイエス様の後にも当然子どもたちが生まれています。恐らくこの時はその子どもたちがまだ救いにあずかっていなかったのだろうという説もあります。ですからあえてイエス・キリストは、この愛するヨハネにマリヤを託したと。

## 2. すべての人々に対する憐れみ 28-30節

こうして主はご自分の母親に対して憐れみを示しています。でも覚えておきたいことは、ご自分は十字架に架かって血を流し、もうまさに息を引き取る瞬間が近づいている状況にあって彼が考えたことは、自分のことよりもその愛する母のことであって、そしてこの主の憐れみというのは彼女だけにとどまるものではないということです。すべての人々にその憐れみが示されています。28-29節「この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って、聖書が成就するために、『わたしは渇く。』と言われた。そこには酸いぶどう酒のいっばいはいった入れ物が置いてあった。そこで彼らは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソブの枝につけて、それをイエスの口もとに差し出した。」と。「イエスは、すべてのことが完了したのを知って」と書いてあります。つまりこのイエス・キリストの十字架には神様のご計画があったということです。その計画のすべてが「完了したのを知った」。主がこの世にお見えになったその目的です。そのすべてがまさに果たされた。

### 1) あなたを神の怒りから救い出す

イエス様がこの世にお見えになったご計画とは一体何だったのか——。イエス様が死んでくださったその目的は一体何だったのか——。それはあなたを神の怒りから救い出すことです。何となく私たちは神というと、優しいおじいちゃんのような存在であって我々の願うことをかなえてくれる存在だと残念ながら思っています。でも聖書が教えている神はそうではない。あなたや私たちを愛して下さっています。でも同時に罪を憎んでおられる正しいきよいお方です。Iヨハネ2:2にこのヨハネが「この方こそ、私たちの罪のための……なだめの供え物なのです。」と書いています。またIヨハネ4:10で「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。」とあります。「なだめの供え物」ということばが繰り返されています。これはどういうことかということ、「なだめる」、つまり誰かが私たちに対して怒りを持っておられるから、なだめる必要があるのです。

### ◎ 神の怒り

聖書は私たちに私たちの創造主なる神は私たちに対して怒っておられるのだと教えます。あなたのすべてのことをご存じである神は、あなたの罪に対して怒っておられる。その罪を見てただ「仕方ないね」とか、「みんな弱いものね」とか言っておられるのではない。その罪を知っておられる神はその罪に対して怒りを持っておられる。我々は残念ながらこの神の怒りを買うようなことを行っているのです。

### ① 神に対する不従順

どんなことかと言うと、まず我々は我々を造ってくださった神に対して不従順です。この方に従うのではない。かえって自分勝手な、好き勝手な生き方をしてきました。本来ならば神様に従う人生を歩むべきなのに、私たちはこの神に逆らい、自分勝手な歩みをしてきたと。みことばはこう言っています。「御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」(ヨハネ3:36)と。大変厳しいメッセージをみことばは与えています。神に逆らうならばそこには必ず神様からのさばきが待っています。

### ② 神が憎まれることを選択している

二つ目に言えることは神が憎まれることを我々は平気で行ってきました。神がおられることを知っていながらその神を神とてあがめていません。そして我々は神でないものを神とてあがめている。聖書はこう言います。「不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしま」(ローマ1:23)ったと。我々が神として崇拝しているものは創造主なる神ではありません。でも我々は神としてそれらを崇拝し、そして神の前に罪を積み上げているのです。私たちは死罪に値するようなことを平気で行っていきます。神を憎む者であったり、人を人と思わない者であったり、高ぶる者であったり、悪事をたくらむ者であったり、親に逆らう者であったり、そんなふうパウロはローマ人への手紙の中でリストを並べています。きよい正しい神様が喜ばれることではなくて、その神が憎んでおられることを我々はみずからの意思で選択し、そのような歩みを続けてきた。

### ③ 神を第一にしていない

また我々は神よりもほかのものを愛している。神よりも物を愛したり、金を愛したり、名誉を愛したり、そして何よりも自分を愛している。愛すべき神を第一に愛するのではなくて我々はそれ以外のものを愛しています。

### ④ 神を拒み続けている

またもう一つ言えば、私たちはこの神を拒み続けています。神は私たちを拒んでおられないのに我々

が神を拒んでいる。私たちが神を知ろうとしたがらないと言います。あなたは頑なさや悔い改めのない心のゆえに、どんなに神の話を聞いても、どんなに神があなたを愛してくださっていることを聞いても、私たちはその神を愛そうとはしない。

その罪に対して神は怒っておられるのです。その怒りをなだめることが必要なのです。そこでイエス・キリストが人として来てくださり、十字架に架かってあなたの身代わりとなってさばきを受けてくださった。あのイエス・キリストの十字架はあなたに対する神の怒りをなだめるためだったのです。先ほどお読みした I ヨハネ 2 : 2 で「この方こそ、私たちの罪のための……なだめの供え物」だとありました。この「なだめる」というのは「怒りを静める」という意味だけではなく、「満足」という意味があります。ということは、イエス・キリストがご自分のいのちを神の怒りをなだめるために捧げてくださったイエス・キリストのあの十字架、このいけにえは神を満足させたと言っているのです。イエス・キリストがあの十字架で死んでくださり、神はそれを見てこれで十分、もうこれ以上の何かが必要ではないのだと、このイエスの十字架で十分であると、そのように言われたのです。その証拠がイエス・キリストがその死から敢然とよみがえってくる、そのよみがえりです。どんな罪でもこのイエス・キリストの十字架によって赦されるのです。

## 2) 救いの完成

見てください。イエス・キリストが十字架に架かった時、29節に酸いぶどう酒を捧げたとあります。我々は十字架というと非常に高いところにはりつけにされているように思うのですが、手が届くぐらいの距離感であったことが教えられています。そしてここに置かれていた「酸いぶどう酒」というのは特にローマの兵士たちが渴きを癒すために飲んだ飲み物です。イエス・キリストが「渴く」と言われたので、その兵士たちは「海綿をヒソプの枝につけて、それをイエスの口もとに差し出した。」、イエスの渴きを癒すためです。30節では「イエスは、酸いぶどう酒を受けられると、『完了した。』と言われた。そして、頭を垂れて、霊をお渡しになった。」とあります。イエス様が最期にそのぶどう酒を口にして言われたことは「完了した」でした。十字架に架けられた時に私たちが知っていることは、大変な渴きを覚え、大変な出血があり、苦しんで呼吸困難になって死んでいくということです。まさにイエス・キリストが息を引き取るその瞬間、大変な渴きを経験されていたかもしれない。最後の声を絞り出すためにもこの渴きを潤す必要があったのかもしれない。いずれにしろ最期にイエス様はこの30節にあるように「完了した」と言われ、「わが霊を御手にゆだねます。」(ルカ 23 : 46) と言って息を引き取るのです。この「完了した」ということば、ただそれを見ていた人たちやイエスをねたんでいた多くの人たちからするならば、これで厄介者は消えたと、また自分たちの天下がやって来ると思ったかもしれない。しかし、イエス・キリストが言った「完了した」ということばは勝利の宣言でした。イエス・キリストがこの地上に来てくださったその目的のすべてを「完了した」のです。イエス・キリストが十字架の上で「完了した」と叫ばれた時に、私たちの心が喜ぶのです。イエスの十字架によってイエスを信じる者のすべての罪が完全に永遠に救われる、救いが完成したのです。救い主である方がこの世にお見えになり、そしてあの十字架の救いを完成してくださった。このイエスの叫びがそれを証明しています。この世に来てくださったその目的のすべてが「完了した」のです。

イエス・キリストはいよいよ死を迎えたのではない。彼はご自分から進んでその霊をお渡しになった。なぜなら死ぬために来られたからです。そしてこの死をもって、我々人間に一番必要な罪の完全な赦しを備えてくださった。この「完了した」ということばには「成し遂げる」とか「成し終える」とか、「成就する」とか、「実現する」という意味があります。確かにイエス・キリストのあの十字架は神のご計画をすべて成し遂げられた感謝な叫びでしょう？私がこの世に来た目的はすべて「完了した」、終わったと。あなたのために完全な救いを私は備えたと。私たちの罪を赦すために、我々を神の怒りから救い出すために、主イエス・キリストはこの世にお生まれになり、そしてみずから進んであなたの身代わりとなって十字架で死んでくださった。ここまでして主は私たちに、あなたに憐れみを示してくださった。憐れみはマリヤだけではなかった、あなたにも示されたのです。

イエス様がご自分のことを良い羊飼いだと言われていました。私は良い牧者ですと言われた。「良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」(ヨハネ 10 : 11)、良い牧者は自分の羊を守るためには自分のいのちを喜んで捨てる。まさにイエス様はそれをあなたのためにしてくださったのです。ご自分のいのちをあなたのために喜んで捨ててくださった。こうして、あなたに一番必要な救いを備えてくださった。それでいながら、人間はこの方を受け入れていません。今も多くの人たちがこの方を拒み続けている。ちょうどイエス様が来られてイエスを十字架ではりつけにする時の人々と同じように、今も多くの人々がこの主を拒み続けている。そんな人はこの中にいませんか？神に背を向け続けている人、神を拒み続けている人、神はこんなにもあなたを愛してあなたのために完全な救いを備えてくださったにもかかわらず、ご自分のいのちを捨ててあなたにこんなにもすばらしい救いを備えてくださったにもかかわらず、

まだあなたは背を向け続けている。悔い改めることです。その間違っただ歩みを神の前に悔い改めて、あなたのために十字架で死に、よみがえられたイエス・キリストをあなたのまことの神として、あなたの救い主として信じて、この方に従うことです。この方はあなたを救うために来てくださった救い主であり、すべてを造られたまことの神です。我々はこの方に逆らうのをやめて、この方に従い始めるのです。心からそれを願う人はいませんか？信仰によって私たちは新しい歩みを始めていきます。主に逆らってきたならば、どうかこのクリスマスの日に今それをやめることです。そしてこの救い主を信じて主に従う新しい正しい歩みを始めることです。そのことを心からお勧めします。

クリスチャンの皆さん、あなたの人生はこの主の恵みを覚え、それに感謝するものですか？こんな犠牲をもって救いにあずかった者として、あなたはその感謝を日々表していますか？私たちはそのために生きるのです。どうか残された時間をそのためにしっかりと歩み続けていきましょう。救い主は来てくださった。こんな大きな犠牲をもってあなたや私を救ってくださった。私のために生きなさいと、当たり前です、この方が我々の神なのですから。その歩みをもって神様に感謝を表しましょう。